

川端康成「令嬢日記」論

劉 文 娟

はじめに

「令嬢日記」は、川端康成が「福岡日日新聞」一九三四（昭和九）年一月一日（月）付朝刊紙上に「新春女風景」【その一】という副題を附して発表された掌の小説である。著者生前のいずれの単行本・全集にも収められず、「未刊行作品」として三五巻本『川端康成全集』第二二巻（新潮社 一九八二・七）に収録されている。

作品は石川啄木の歌二首から始まり、老会社員の娘・朝子は日記帳の頁の隅に印刷された歌を眺めながら、昼間母に連れられての年始回りのことを思い出す。どこでも話題は朝子の結婚の話ばかりであった。朝子の着ていた訪問着は、母が嫁入り支度で長らく着られるようにと念入りに選んだ晴着である。「新しい年の希望も計画も」心に浮かばない朝子は、元日の日記を書けないまま年賀状を手に取り、同窓のA、B、C、D子のことを思い出しな

がら、「自分一人が古い時代に、おだやかな家庭に取り残されて」いるように感じる。その時二階から妹たちの百人一首の札を取る騒ぎ声が聞こえ、「唇をなめ消す紅や初鏡」という句を日記の頁に読んだ朝子は、化粧を拭き取ると「妹」の年頃に帰るために梯子段を上っていく。

小説「令嬢日記」において、「時代の不安の雲」に覆われている戦前の社会情勢は、古い家庭に取り残された娘・朝子の日常生活における実感を通じて活写されている。旧習にとらわれ、自由に生きていられない朝子の生活ぶりは、それぞれに時代の影を背負って独自の道を歩んでいるA、B、C、D子のそれと対比的に描かれている。

先行研究において、長谷川泉は「令嬢日記」を「女性の生活力や本質的力を扱った作品」だと評し、細島大も「時代の不安」に自らの不安を重ねつつ、「妹の年頃にかへ」ろうとする朝子の姿勢こそ、川端における現実逃避の傾向を示すものとして注目すべきであろう^①とするなど、女性の生き方に注目している。しか

し、いずれも作品内に立ち入った分析はしておらず、その意味するところは曖昧である。ほかに本作に対する論考は見られず、文章を具体的に分析・考察しなければならない。その際、作品が暗い時代を背景にして主人公朝子や同窓の女性たちを描出しているということや、新年の始まりの日に発表された意味などを視野に入れて考察する必要がある。

そこで、本稿ではまず作品に登場している若い女性たちがどのように描かれたのか、それがどういう社会背景をもとに写し出されたのかを究明する。そして作品冒頭における啄木の歌と作品全体との関わりを考察する。さらに小説の結末の意味を考え、女性の生き方を通じて提示されている作品の主題を明らかにしたい。

一、不安定な時代と経済不況下の家庭生活

小説の冒頭には「静かな落つき」がない心境と疲労を感じる主人公朝子が登場する。「日記帳の頁の隅に印刷された」歌を「ぼんやり眺めてゐた」のである。そして、「頭がぼんやりするのは、結びなれない日本髪の高さのせみであらうか。とらへどころのない時代の不安の雲が、誰の上にもおつかぶさつてゐるせみであらうか」と時代に対する茫漠とした不安が語られている。

「元朝の新聞には、大政治家や大実業家が、新しい年の国家の希望や、国民の覚悟について、威勢よく語つてゐた」というのだが、「国民の覚悟」とは何を意味するのか。「朝日新聞」一九三三

(昭和八)年二月二十四日付朝刊に掲載された「国民の覚悟徹底に各機関を総動員 連盟脱退後の方策 文部省側決定」という記事によると、文部省は「連盟脱退後における日本の立場及び覚悟等を一般国民に十分徹底的に」知らせるため、各機関を動員し、講演会、講習会などを開催するとともに積極的な広報活動を通じて「全国に呼びかける」との方針を決定したのである。同年六月に文部省社会教育局が「非常時と国民の覚悟」というパンフレットを発行している。その中で、国体を動揺させる過激思想、窮迫した経済状況及び外交上の困難すなわち「内憂外患交々至る」非常時の国家内外の情勢を叙述したうえで、目の前の難局を乗り越えるために、時局の現状をよく認識し、「自力更生」の意気や「堅忍持久」の精神を發揚し、「一致団結」して力を傾けなければならぬと国民に呼びかけている。「国民の覚悟」というのは、つまり「非常時」に直面して国家と共に戦う自覚である。

新聞の中の「威勢」のいい刺激的な語句に喚起され、「朝子も新しい力の加はつたやうな足つきで年始廻りに出かけて行つたのであつたが、ぐつたりして帰つてみると、それらのえらい人達の言葉は、老会社員の家の平凡な娘の朝子には、なんのかかはりもない大言壮語のやうに思はれる」のである。不安定な時代に重苦しさを感じている人々の政治や経済への失望感、無力感が、平凡な家庭の娘・朝子の気持ちを通じて表されている。

では、老会社員の家の状況はどうなっているのか。小説は朝子が年始廻りに着ている「訪問着」に焦点を当てて展開している。

「あの小間使しやうがないね、紅茶をこぼしてさ、茶碗の底が濡れたまま出すんだもの。晴着のお客様にね。お前、よこしやしなかつた？」

と母は重役の家の門を出るなり、朝子の前に腰をかがめて、訪問着の膝を覗いた。朝子は火が出るほど赤くなつたが、帰つてたむ時には、やはりしみはないかと真剣に調べずにはゐられず、宝船を刺繍した半襟の白粉を發揮油で拭き取りながら、この訪問着一枚を買ふにも、一家の争ひがあつたことを思ひ出した。^②

訪問先の重役の家を出ると、すぐ「小間使」について文句を言いながら朝子の着ていた晴着が汚されはしなかつたかと「腰をかがめて」覗く母の大げさな行為に、朝子は恥ずかしさのあまりに「火が出るほど赤くなつた。しかし、やはり「しみ」などを気にかけないではいられず、帰宅後に真剣に手入れをしたのである。そのように母娘に大事にされている晴着には「一家の争ひ」という思い出が隠されている。

母は「銘仙一反、伊達巻一本買ふにも、すべて嫁入り支度といふ頭から割り出して、しかも、結婚後五年も七年も着られるといふことを第一にして」「地味なもの」と考えている。「財産家の息子でない限り、今日の若い者の安月給では、女房のなりを整へてくれる余裕など、先づあるまい」とその理由を挙げている。そして、父は「胸算用より少なかつた年末賞与」を七人の子供に割り

当てて「幾度も数へ直しながら、顔をしかめてゐる」のである。若者の安給与では生活の余裕がなければかりでなく、老会社員の方も少ない「年末賞与」に困つた表情を顔に出している。

家庭の暮らしに余裕がなくなつてきているのは、減俸減給、物価騰貴といった社会事情を背景にしている。一九三一年（昭和六年）六月から、官吏の減俸が実施された。減俸率は「月俸百円以上が五分、月俸二百円以上が一割以上、年俸一万二千円の親任官が二割だつた」のである。「民間ではそれ以前から厳しい減給が行われていた」といい、「首を切られるよりも自ら減給を願ひ出る者もいた時代」であつたという。^③一九三三年（昭和八年）の内閣家計調査によると、当時の給料生活者の世帯主収入平均が八五四円八四銭であつた。^④一九三〇（昭和五年）年七月の小訂利得が中央公論に発表した「初任給調べ」には、出版前年の一九二九（昭和四年）年の初任給一覧が出てゐる。それを参照してみると、官庁は普通官立の医学部・工学部出身の一〇〇円から私大出身の経済学部の五五円までで、民間会社は例えば、三菱財閥の七〇円（大学、専門学校卒）か三五円（中等程度の学校卒）、三井銀行の七五円（大学卒）か六五円（専門学校卒）、住友財閥の八〇円から三五円までであることが分かる。経済不況などによる月給減少がそのまま「年末賞与」に直結していくことは想像に難くない。

「朝日新聞」一九三三年一月四日付朝刊紙上に「米も炭も乾物もすべて騰貴 下層階級が景気づいて 月給取は苦しい」という記事が掲載されている。「鮮魚一般昨年の今頃に比して約三割

の騰貴、青物もまた既報通りの酷い暴騰を示して来てゐる」ほか、「主要食糧品の大部分が相当な騰貴を見せてゐる」という。結論として、「いよくインフレ景気の物価騰貴時代が実現し、給料生活者の台所が脅かされる日が近づきつゝ、あるのではあるまいかと観測されてゐる」と述べられてゐる。

世間では年々派手な衣服が好まれるようになるために、一〇年前に仕立てた着物も今「地味で困る」と朝子と言うが、母は結婚してからもずっと着られるようにと「地味なもの」を勧める。不況が長引くと派手な衣装もだんだん着られなくなるだろうと考えたからではないか。一方、父は「戦争が起こつてみろ、戦争が人目に立つやうなものを、びらびら着て歩けるか」と言つて、母娘を沈黙させた。さらに、「だいたい、嫁入りに持つて行つたものを、さうさう着歩けると思つてゐるのは、まだ甘いよ。いづれ亭主が赤坊のために質屋へ入れる覚悟でな、質屋向きのを買つた方が利口だね」と冗談半分に言つてゐる。実際に生計が困窮しているだけでなく、これからの生活をも悲観的に見てゐることは、母の着物を選ぶ際の言動や父の皮肉めいた話から窺い知れる。

さて、その「一家の争ひ」を引き起こした晴れ着を着て、朝子は「重役だとか、出身女学校の校長だとか、父の旧友の代議士だとか、平素顔出ししない家へ母に引き廻されて年始に行き」、結婚するために自己宣伝する。まるで「『ここにも一人こんな上等の花嫁志願者がゐることを、お思ひ出し下さいまして、何分よろ

しく」と哀願に歩いてゐるのだと思はれもする」のである。結婚のことで日々苦しまれて日常に張り合いが感じられない朝子の生活ぶりである。しかし、彼女と対照的に、同窓のA、B、C、D子は全く違つた人生の道を歩んでゐる。

二、同窓のA、B、C、D子

A子は婦人評論家に新聞で話題にされたことがあり、「百貨店の婦人洋服部に勤めて」ゐる。

A子は初めて月給を貰つた時、ひどく驚いて、

「まあ、持てあましてゐた時間をお店で愉快につぶさせて貰ふ上にお金をいただくなんて、思ひがけないことですわ。このお金は貧民救済事業にでも寄付して下さい。」

と云つたさうだ。

A子はお金のためにはなく自己の生活を豊かにするために仕事を楽しんでゐる。彼女は「勤務時間も服装も、並の女店員とはちがふのである。店員の規制に縛られることなく、ただ高級婦人客の接待をしたり、相談相手になつたりするだけなの」である。彼女のような「ブルジョアの令嬢は、之までの女店員より遙に教養があり、趣味が広く、朗かな社交性があるので、客に喜ばれ、どこの百貨店や大きなお店でも、競つて雇」う対象となつてい

る。

A子はいわゆる富裕層の「ブルジョアの令嬢」の代表である。一九三五年に大阪毎日新聞・東京日日新聞によって創刊された「富裕層の若い女性向け」のグラフ雑誌「ホーム・ライフ」の創刊号⁵から彼女たちの世界を垣間見ることができ。創刊号は次のような写真が載っている。「日光・中禅寺湖のヨット・レース」「交詢社『クラブの午後』」、「洋画を習う令嬢たち」、「大阪・茨木のゴルフカントリー・クラブ」、「東京・銀座と神戸元町の「あるく……ファッション」などである。そして写真に続く巻頭の記事のタイトルは「令嬢ばかりのヴェランダ・パーティー／近代女性の叡智と情感が／構成する趣味生活の話題」である。この記事は東京・清澄庭園に一〇人の「令嬢」を集めて行った座談会の記録であるが、話題は映画、趣味、ファッション、グルメ、そして結婚についてである。彼女たちは洋画を見ており、ハリウッドの映画やフランス映画が好きだという。趣味は「水泳・スキー・テニス・乗馬」で、ファッションはほとんど洋装であるが、結婚については「若い時は結婚なんか考へて見るのもいやだといふ気持ちです」と述べられている。A子も同様の考えを持っており、「女学校の頃から、降るほどの縁談があつた」にも関わらず、「職業戦線」に身を投じて、生活を享受しつつも、結婚を視野に入れていない。

同じ座談会における次の発言に注目してほしい。「私のように洋服ばかりきてゐると、日本服のいきなもの、渋いものが着たく

なりません。」「私もさうです。いつもキモノを買ふ時はお母様と喧嘩です。お母様は派手な方がいゝとおっしゃるので」などとあるように、着物を買う時に母娘で「喧嘩」をしているが、朝子の家庭とは正反対の内容となっている。ここで注意すべきなのは、両家庭の着物のとらえ方の違いである。前者は現時点での個人の趣味を優先して考えているが、後者は実用性に拘って朝子の結婚後の流行を問題とするばかりで自らの好みなど考慮する余裕もない。そこから両家庭における経済状況の差異が窺える。

続いてB子の検討に移ろう。

「今年こそは亭主が就職出来すやうにつて、恵方詣りしよ
うと思ふのだけれど、朝子さんどこか靈驗あらたかな神様を
知らない？」

と、相変らず乱暴な字で書いてゐるのは、B子であつた。

B子の「恵方詣り」の話は、一九二九（昭和四）年の世界恐慌とその翌年から始まつた昭和恐慌下の就職難を背景にしている。一九二九年には「大学は出たけれど」という大学生の就職難を描いた映画の題名が流行語となり、「この年、3月の東京帝大（東大）卒の就職率はわずか三〇%であつた。内務省の推計では失業者は三十万人を数え、有識青年層の失業者は十万人に達する」と発表された。同年一〇月二日には「東京市営の職業紹介所で知識階級のための失業登録を受け付け始めた」⁶のである。「朝日新

聞」一九三二年三月三〇日付夕刊紙上に「憂うつな求職な春 紹介所を訪ふ青少年女約四千 しかも就職者は一割」という記事が載っており、「就職戦線」が白熱した厳しい時期を迎えていることが分かる。

一方、B子の自由奔放な性格も「乱暴な字」や、女学校中の「評判の熱烈な恋愛結婚」を通して描かれている。朝子は、生活の苦境に立つても「やつぱり明るく笑ひながら、じやうだんのつもりで」葉書を書くB子を思いながら、「もしかするとがらりと性格が變つて、もう世帯やつれしてしまつてゐるのではなからうか」と彼女の近況を想像している。

ここで朝子の視点からB子の存在がどのように意味づけられているのかに注目してほしい。相手の経済状況や家柄といったことをしっかりと見定めたうえでの見合い結婚ではなく、「評判の熱烈な恋愛結婚」をしたB子は、亭主の就職難などにより生活が大変で、もう「世帯やつれ」してしまつたのではないかと思われている。自身の考えを通して同じく生活の辛さを味わうことになるという朝子の当時の社会生活への見方が垣間見られる。

C子の葉書は「幾十組もの男女が踊る写真の下に、新年の舞踏会の誘ひが印刷」された「ダンス・ホールの宣伝」に自分の名前を「小さいペン字」で書いてあるだけである。「ダンサアになつたことを、もうC子は同窓の友に隠ししなければ、恥しいとも思は」ないのである。それは彼女が当時の社会的な偏見を押し切つて自力で生活する姿、言い替えれば自立的態度を表している。

関東大震災後退廃的、「利那的な享楽志向」を象徴する「エロ・グロ・ナンセンス」がアメリカ文化の影響下に社会を席卷していく。「震災で焼けなかった新宿は、郊外と結ぶターミナル駅を中心に、新たな歓楽街として栄える。安価な飲食店やダンスホール、軽演劇の劇場」などが、「地方出身の若者たちを吸い寄せ」た。「地方出身のサラリーマンや職業婦人の『新中間層』が、大衆文化の担い手となつていた」のである。ダンスホールのダンサーであるC子も、このような「利那的な」文化の主役であると言える。しかし、彼女は決して墮落して享楽のためにダンサーになつたのではなく、「生活のため、パンのため」に、あるいは一家を養うために「享楽機関に飛び込んだ」のである⁷⁾。

「職業婦人」として働くダンサーたちには、「最高二百円から三百円の月収を確実に得てゐる者が、一流のホールなら必ず十人以上はゐる」という状況であつた。「男子ですら月収二百円以上と云へばインテリの中でも課長級以上である」⁹⁾というのだから、一部のダンサーの収入は一般の男子の収入を超えている。C子は、世間一般の人より高い収入を得る機会が多かつたと考えられ、少なくともダンサーを職業とすることによって一定の収入を得て自立している。彼女は職業婦人としてのプライドを持っており、ダンサーであることを誰にも隠す必要がない。朝子は「ホールの広告以外に、一字も書かない年賀状から」C子のそのような意志の固さを多く読み取つたのである。そこには、ダンサーというイメージに凝縮された都市文化に対する社会的な位置づけが見られ、

ダンサーという職業に対する世間の偏見への反発も映し出されている。

A、B、C子は同窓生でありながら、卒業後には大きく異なる水準で生活している。そこから戦前昭和の格差社会の一端が汲み取れるのである。それでは三者とは異なり、現在の暮らしがほとんど明かされないD子の葉書から何が読み取れるだろうか。

D子の手紙には「今年も結婚しては厭よ。」といふ文句があつて、いまだに少女の友情の夢が覚めないであらうか。

「今年も結婚しては厭よ」というD子の文句から、朝子は「少女の友情の夢が覚めないであらうか」と推し量っている。それは結婚に悩まされ、俗悪な現実から遠ざかって女学校時代の夢をいつまでも見たいという朝子自身の内心の投影ではないだろうか。

『娘が語る母の昭和』^⑩には、一九三一（昭和六）年に大手前高等女学校から奈良女子高等師範学校に入学した母親の女学生時代の日記が紹介されている。そこでは次のような一九三四（昭和九）年二月二七日の日記が引用されている。

卒業したら就職困難の苦痛もあるし、家にいてぶらぶらしていることの苦痛もあれば、遠くへ行くことの出来ぬ家庭の事情、それに就職したとしてもいわゆる先生タイプ、オール

ドミスタタイプの女教員になるのはイヤだ。むしろ平凡な結婚をした方がいい。いや結婚と言えば青春時代の結末で、結婚は墓場なりとか言つた人もあるくらいだ。してみると学校を出て、就職もせず、結婚もせず、ブラブラしていられれば一番いいのだが、家庭の事情、世間の体面で、そんなわけにはいかない。どうしたらいいのだろう。ピアノでも買つてもらつて、その他茶道など続けて芸術に没頭してゆくなら、独り身の憂さも拭えるかもしれない。けれどもそれはあまりにも具体性のないことだ。（中略）理想も何も、メチャクチャになる人生、それがこれから先、ずっと続いているものなら、せめていまだけでも、どうして楽しませておいてくれないのか。いま楽しんでおかなければ、もう楽しい、うるわしい時つて、ないのじゃないか？

「ピアノ」や「茶道など」という「芸術」は、一九二〇～三〇年代あたりから一般化大衆化していく和洋折衷の「女学生文化」の世界を象徴するものである。そのような「女学生文化」と卒業後の「現実」とのギャップが、ここでは明確に述べられている。予想される将来よりも今の自由を大切にしたいというのは、戦前期の女学生の夢だったことが想像できる。

一方、女学生時代に日記や手紙のやり取りを通して女学生らしい感性や感覚が共有され、親密な関係が築かれていく。稲垣恭子は「女学生にとって手紙の世界は、自分たちを『女学生』として

一般化し、現実の女学校生活を核としながらもそこからやや距離をとった理想的な世界を創出することによって、ロマンディックで親密な理想的関係を経験することを可能にしてくれる独特のリリティをもった世界であった。それは、『女学生』という時期に限定することによって、『現実』を受け止め対峙することから回避させるものでもあった」と述べている。さらに「現実と理想世界の間に創られたこのような『女学生』的な世界やそれに基づく絆は、社会的な連続性をもたない一時的なものに見える」にしても、『それは現実生活からまったく消去されたわけではない。手紙を媒介とする『理想』的關係やそれによって思い描かれる世界は、その後も『現実』を読み解くコードとして、ものの見かたや感じかたのなかで維持されていった面が大きい」と指摘している。D子の手紙は、朝子に女学生的情緒を蘇らせ、現実を相対化することの出来る世界に「絆」を求めさせているのである。

ここまで、「机の片隅に重ねた年賀状」を通じて、同窓のA、B、C、D子の生活状況を見てきた。彼女たちはいずれも因循な生活を捨てて自由奔放に生きている。

片岡鉄兵は、一九二七（昭和二）年刊行の『モダンガールの研究』¹²において、モダンガールを力強く肯定している。片岡は彼女たちの特徴を「比較的自由に恋愛を享受し、比較的物質家である。比較的に精神的でない」と指摘し、彼女たちの生活態度を「一、彼女は現実家であると云ふ女性本質を確実に把握して、生活を科学的に合理化して行かうとする。二、彼女は表現に於て自

由であり、ヒステリイに反対なる者、即ち健康で明るい性格の持主である」ようにまとめている。片岡にとつて、モダンガールは時代精神の象徴であり、特定の「職業婦人」のことを指すのではない。「現代のあらゆる婦人が、共通に、或者は濃厚に又ある者は極めて微弱に、程度の差こそあれ、誰も彼も持つて居る型、性格、生活であるに過ぎない。すなわち、あらゆる女が、今日はモダン・ガールのな要素を持つのである」という。

それぞれ時代の影を背負って独自の道を歩んでいるA、B、C子の生活態度は、片岡のモダンガールについての指摘と一致している。彼女たちの持つている「モダン・ガールのな要素」は時代を生きて抜く力になり、彼女たちの生活様式は時代の最先端を行くものである。一方、保守的な家庭に取り残された朝子の生活ぶり（髪型、衣装、結婚観）はそれと正反対になっている。朝子は、両親の意思に従い、結婚のために「高島田の盛装」で年始回りさせられている。結婚のほかにこれといった希望を持っていない。しかしながら、手紙から分かる自由恋愛結婚したB子の現状を消極的に受け止めている。さらに、「今年も結婚しては厭よ」というD子の文句から「少女の友情の夢」まで思い浮かべ、現実から目をそらしている。

三、啄木の歌について

小説は啄木の歌二首から始まっている。本節ではそれぞれの歌

を鑑賞し、それが作品においてどのような役割を果たしているのかを考察する。

何となく、

今年はいい事あるごとし。

元日の朝、晴れて風無し。

第一首は、一九二一（明治四四）年一月号の雑誌「創作」に発表され、啄木死後の一九二二年六月に東雲堂書店から出版された歌集『悲しき玩具』に収められた。初出は三行書きで句読点がない。「今年はいい事あるごとし」という表現の「今年はい」に、昨年（明治四三年）度中を「不幸な年と考えている気持ち」¹³、「苦渋に満ちたものであったという気持ち」¹⁴、「ほとんど自分にとって

『よい事』はなかったな、という情けない思い¹⁵」を隠している。

「今年こそは」の心境である。「なんとなく」に頼りない思いがある。「元日の朝、晴れて風無し」という穏やかな天気から、今年何か「よい事」があるのではないかといい儂い期待と祈願を歌ったものである。何となく今年はいいかよいことがあるように感じられる。元日の朝が晴れて風のない天気であるからだという意味の歌である。

正月の四日になりて

あの人

年に一度の葉書も来にけり。

第二首は、一九二一（明治四四）年一月号の「精神修養」に発表され、同じく『悲しき玩具』に収録されている。初出は三行書きで句読点がない。待ちわびる「あの人」の賀状も届いたのは「正月の四日」になってからである。「待ちかねていた時間の長さ」と、漸く挨拶を交わした喜びと安心¹⁶」が読み取れる。「年に一度の葉書」に、その人とのつながりが薄いことを示唆する。「恒例の年賀状に材をとり、恒例であるがゆえに時には単調な生活のはかない色どりにもなることをいう歌」¹⁷だと解釈されている。正月の四日になって、あの人から年に一度の葉書も届いたという意味合いの歌である。

本文の歌に関連した部分は次のような一節である。

朝子にとつては、今年も結婚出来なかつたと云ふのが歳暮であり、今年こそは結婚出来るかしらといふのが正月なのだらうか。「何となく、今年はいい事あるごとし」とは、結婚以外のなにごとでもないのであらうか。新しい年の希望も計画も、はかばかしく心に浮かばないので、朝子は元日の日記が書けないのであつた。

そして、『あの人』の年に一度の葉書』といふ『あの人』とは、昔の恋人のことであらうかなどと思ひながら、机の片隅に重ねた

年賀状をまた手にとつてみる」というような内容が続いているのである。

このように、小説の全体的構成から見ると、冒頭における啄木の歌二首は、小説の前後半を繋ぐ役割を果たしているのである。つまり、小説は、第一首と関連付けながら前半を締め括り、第二首を契機に後半を語り始めるわけである。また、具体的な内容から見ると、気分が晴れない正月を過ごす朝子は、冒頭に置かれた啄木の歌を思い浮かべながら物思いに沈んでいる。第一首は自分にとつて不幸な年、「よい事」はなかったなという気持ちで、「今年も結婚出来なかつた」という朝子の情けない心境と一致しており、「今年こそは」と「よい事」に寄せる儚い期待もまた朝子の「今年こそは結婚出来るかしら」という正月の願望と重なっている。一方、「朝子にとつては、今年も結婚出来なかつたと云ふのが歳暮であり、今年こそは結婚出来るかしらといふのが正月なのだろうか。……結婚以外のなにごとでもないのであらうか」とのような、すべて結婚に結びつけられることに疑問を投げかける書き方では、結婚のほかに何の希望も持たず、行き先が見えない朝子のもどかしい心情が描き出されている。第二首に関して、「あの人の年に一度の葉書」から「机の片隅に重ねた年賀状」を思いつき、「また」手に取る。今まで何度も見ていたのであろう。「一年も二年も合わない」人たちからの便りを繰り返し返して見るのは、その人たちの近況を気にかけていることを表している。それだけではなく、朝子にとつて、「同窓」の彼女たちの葉書は自分の

「単調な生活」の「色どり」にもなっていたのであろう。歌と小説の内容との対応が見られる。

啄木の歌二首はいずれも明治四三年の作であるが、その年に「大逆事件」が発生し、啄木に大きな思想の変動をもたらしたのである。この時期の啄木の歌には、当時の暗い政治的、社会的動向に対する鋭い洞察と、文学者・生活者としての理想と現実の離反する悲哀が込められている。ここでは、文壇での新思想への弾圧、当時の「時代閉塞の現状」、愛児の夭折に直面しながら、新しい年を迎える複雑な心境が詠み込められている。時代こそ違っているが、作品「令嬢日記」は同じく時代の不安に面する時の人間のやるせなさが描出されている。

四、結末の意味

朝子は彼女等の誰とも一年も二年も会はない。そして彼女等のいづれの道にも進むことも出来ない。自分一人が古い時代に、おだやかな家庭に取り残されて——二階から妹達の百人一首を取る騒ぎが聞えて来る。

唇をなめ消す紅や初鏡

といふ句を、また日記の頁に読んで、朝子は厚化粧をクリームで拭き取ると、とにかくも妹の年頃にかへるために、楽

しきうに梯子段を上つて行つた。

小説の冒頭では、「日記始盆梅の日に静心」という歌を日記の頁に読んで、その歌の世界と、自身の心境との差を実感している。小説の結末では、朝子は同窓生たちと同じように生きていられず、時代遅れになっている自己の現状を意識しながら、「唇をなめ消す紅や初鏡¹⁸」という句を目にする。新年に初めて鏡に向かつて化粧する際、何度も口紅を塗り直して、鏡の中の自分に見惚れている女の姿を歌う一首であるが、そのような歌の情緒が朝子にも移つたのだろう、朝子は「厚化粧」を落とし、百人一首に興じる「妹の年頃」の単純な世界に一時的に帰ろうとするのである。「楽しきうに梯子段を上つて行つた」と表現される結末は、「ほんやり」「不安」といった冒頭部とは対照的である。では、朝子の「妹の年頃」に戻りたいという姿勢をどう理解したらいいのか。作者の同時期の作品を辿りながら見ていきたい。

「末期の眼」は川端が一九三三（昭和八）年二月号の「文芸」に発表した随筆である。芸術家の運命に触れ、川端の芸術観や死生観も垣間見ることができる一編である。表題の「末期の眼」は、芥川龍之介の「或旧友へ送る手記」（東京日日新聞）一九二七・七・二五）に書かれた「自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである」という言葉から取られている。三好行雄は川端における「末期の眼」を次のように解釈している。

末期の眼は死者の眼ではない。死をとおして生を見る独自の発想ではあるが、すべて無に帰す死者の眼とひとしくはないのである。いわば生と死の接点によりがえる利那の認識である。死によつて、あらゆる人間感情のドラマから、まさに解きはなたれようとする人間の眼である。だから、それはいつさいを放下し、同時にいつさいを許すものの謂であり、まさしく虚無を超えた肯定の世界に放たれる視線であつた。末期の眼にうつる自然が真に美しかったとすれば、それは自然があらゆる人間くさい虚飾をはぎとられて、純粹なものそれ自体と化したからだつたに違いない。¹⁹

「生と死の接点によりがえる利那の認識である」「末期の眼」で、虚無を超越し、「あらゆる人間くさい虚飾」が剥ぎ取られたことによつて「純粹なものそれ自体」の美が発見できるのだと述べられている。

川端は一九三三（昭和八）年七月の「改造」に小説「禽獣」を発表した。小説の中で、人間を嫌悪し日々禽獣と暮らしている主人公「彼」は、十年前に千花子と心中しようとしたことがある。「無心に目を閉ぢ」て合掌した千花子の姿に「彼」は驚かされ、「稲妻のやうに、虚無のありがたさに打たれ」て自殺を諦めたのである。羽鳥一英は「千花子のその姿は、彼の無意識の、その憧憬と一致したわけである。さらにいえば、作者自らの、痛苦のどんづまりのはてに浮かぶ憧憬が、千花子を借りて形象化された

わけである」と指摘し、さらに、その「憧憬」を「人間的なものすべて放下し、つまり、それによって他人を侵害し、自らを傷つける、すべての人間的な『我』を放棄し、死生同一と観じたような姿であろう」と解釈している。そういう姿の前では、あらゆる苦悩もまた無意味になると述べられている。

そのような人間的な虚飾をすべて剥ぎ取り、何物にも執着しない「自由な無拘束」な状態に近い「虚無のありがたさ」に憧れて救いを求める姿は、「末期の眼」で「純粹なもの」に美を見る作者に重なっている。また、「令嬢日記」の結末において、「厚化粧」を拭き取り、「妹の年頃」に帰ろうとする朝子の姿勢にも影を落としたのではないだろうか。そして、朝子の「厚化粧」を落として「楽しさうに梯子段を上つて行つた」という行動には、すべてを元に戻して、きりりと生き返る女性の「本質的力」を見ることがもできるのではないか。しかし、それは「とにかく、妹の年頃にかへる」と表現されているように、客観的に見た場合現実を留保した姿勢であり、その狭間の中で一時的に自由の快楽を味わっているとも言える。この問題を最後に考えてみたい。

おわりに

「令嬢日記」は新年に対する儚い期待と旧友からの葉書をもらった喜びを内容とする啄木の歌二首から始まり、前半において暗い時代と経済不況下にある朝子の家庭を舞台に、その日常生活に

おける世帯間の感覚的ずれを通じて、それぞれの将来への不安な気持ちや結婚に苦しまれて張り合ひのない朝子の暮らしぶりを描き出している。後半において年賀状によって伝えられている同窓のA、B、C、D子の現状及びそれに対する朝子の受け止め方を描写することによって現実生活に溶け込めずに時代状況から遊離している朝子の人物像を浮き彫りにしている。

片岡は「女性がりアリストである、現実根ざした生活をなす者である」、「女性こそ、斯る世界に生存する適者であるのだ」と述べ、モダンガールの「現実家であると云ふ女性本質を確実に把握して、生活を科学的に合理化して行かうとする」という点がモダンガールの性格態度を決定していると指摘しているが、作品中A子からC子のいずれも合理的な生活への憧れを持って努力している。しかし、朝子は「彼等のいづれの道に進むことも出来ず、時代に取り残されているように感じている。時代に反抗することもできないが、従順に生きることもできないのである。そのような観点から暗い時代をどのように生きるのかという命題を負わされた視点人物であったと言える。

作品は正月に思い悩む朝子の視点から、将来の見通しが立たない不安の中を生きる女性たちの姿を相対的に捉えている。各人物はそれぞれに時代と向き合った生き方をしていると見えるが、朝子自身はいずれをも積極的に行きとることができずに「とにかく妹の年頃にかへる」ことにする。それによって俗世間のわずらわしさを一切捨てて現実から解放された快楽を体得している。そ

それは客観的には一時的な解放を求めた逃避に過ぎないが、朝子にとっては閉塞状況の中で現実には押しつぶされずに本来のままの姿でいられるような工夫だと言える。時代に取り込まれることなく遊離すること。そうした朝子を通じて時代を相対的に浮かび上げさせ、そこに欠けているものが照らし出されたのである。作品は明確な結論を導いてはいないものの、朝子を視点に据えたごく短いこの掌編には、このような時代をいかに生きるべきかという主題が通底しているのである。

『令嬢日記』において、川端は同窓のA、B、C子のような現実社会に溶け込んだ理性的な生き方に注目しながら、片岡のように積極的に肯定しなかったが、これといった理想的な生き方を打ち出せなかった。当時の川端は「立場も主張も現在は格別意識致し居らずといふが、素直な回答かと存じ候。自省すれば無論あるべきもの、他より見てもあるべきもの、さりながら、自分では日常考へ居らず候。只今はさういふ一時期に小生居るものと存じ候⁽²⁾」と自らの方向に確信が持てない文章を書き記している。一方、掌の小説の執筆状況を見ると、『令嬢日記』に続いて『愛犬安産』（東京朝日新聞）一九三五・一・二二）が発表されてから、『ぞくろ』（『新潮』一九四三・五）まで、八年間以上にわたって、執筆が中断されていることが確認できる。時代に取り込まれることなく芸術の独立性を確保することは、川端であっても容易ではなかったことを物語っている。作品『令嬢日記』は暗い時代の中での若い女性たちの生き方を描きながら、現実と対峙す

る作者の姿勢をも映し出している。

注

- (1) 『川端康成全作品研究事典』（勉誠出版 一九九八・六）
- (2) 本文引用は全て『川端康成全集』（全三五巻）第二二巻（新潮社 一九八二・一）による。
- (3) 鷹橋信夫『昭和世相流行辞典』（旺文社 一九八六・一）
- (4) 『昭和国勢総覧 下巻』（東洋経済新報社 一九八〇・一）
- (5) 『ホーム・ライフ』（大阪毎日新聞・東京日日新聞 一九三五・八）
- (6) 注(3)に同じ。
- (7) 読売新聞昭和時代プロジェクト『昭和時代 戦前・戦中期』（中央公論社 二〇一四・七）
- (8) 小野薫『ダンスホール』（東学社 一九三五・一〇）
- (9) 高橋桂二『新社交ダンス』（高瀬書房 一九三三・五）
- (10) 武田佐知子『娘が語る母の昭和』（朝日新聞社 二〇〇〇・六）
- (11) 稲垣恭子『女学校と女学生』（中央公論新社 二〇〇七・二）
- (12) 片岡鉄兵『モダンガールの研究』（金星堂 一九二七・六）

(13) 今井泰子注釈『石川啄木集（日本近代文学大系23）』（角

川書店 一九六九・一二）

(14) 岩城之徳『石川啄木必携』（学燈社 一九九三・六）

(15) 上田博『石川啄木歌集全歌鑑賞』（おうふう 二〇〇一・

二）

(16) 注（15）に同じ。

(17) 注（13）に同じ。

(18) 『杉田久女句集』（角川書店 一九五二・一〇）に収録されて
いる。「大正七年より昭和四年まで」詠んだ句で、具
体的な創作年月未詳。

(19) 三好行雄「禽獣（一）（川端康成―現代文学鑑賞十二）」
〔国文学解釈と鑑賞〕至文堂 一九六三・一二）

(20) 羽鳥一英「一九三〇年代の川端康成（上）——『浅草紅
団』から『雪国』まで——」〔国語と国文学〕第四四卷第
八号 至文堂 一九六七・八）

(21) 岩田光子は「『禽獣』」「学苑」昭和女子大学近代文化研
究所 一九七八・一）において、「千花子の全く自己放棄
のともいえる合掌の姿」は「自由な無拘束を象徴してい
る」と指摘している。

(22) 注（12）に同じ。

(23) 「〔現在における文芸上の我立場・主張〕」〔文芸〕一九三
三・一一）

付記

本稿は二〇一六年四月一六日に昭和女子大学にて開催された
川端康成学会第一六八回例会において発表したものをもとに加
筆修正して作成したものである。

（りゅう・ぶんえん 青島科技大學講師・本学大学院博士後期課程）